

| 海外アカデミック・ディスカッション | |
|-------------------------------------|------------------------|
| バイリンガリズムと教育：21世紀のバイリンガル教育と多言語教育に向けて | |
| 高友晗（ゴイハン） | 人間発達科学専攻 |
| 期間 | 2010年9月6日～2010年9月24日 |
| 場所 | アメリカ合衆国 ニューヨーク市 |
| 施設 | ニューヨーク市立大学 グラジュエイトセンター |

内容報告

1. 本学での研究内容とその背景

グローバル化が進む中、先住民・少数民族教育において、バイリンガル教育からトライリンガル（三言語）、またマルチリンガル（多言語）教育へシフトする動きが大きな教育変化の一つとして注目を集めている。中国少数民族地域では、1950年代に始まった二言語併用教育 1 政策のもと、少数民族のため特別な措置として設置した民族学校において漢語と民族語によるバイリンガル教育が行われてきたが、英語教育必修化によってトライリンガル教育を実施することになった。経済的に立ち遅れた農村地域や少数民族区域の中には義務教育完全普及に至っていない地域もあるが、グローバルな競争に参入するための手段となる英語能力を習得するために、2001年から民族学校において、小学校一年次またそれ以上の学年から英語を学ぶことになり、英語習得を通じた経済発展に期待が寄せられている。本論文で事例として取り上げる内モンゴル自治区のモンゴル族学校では、1992年に中等教育課程で英語教育が必修化される以前は、ほとんどの学校で外国語教育を行ってこなかったが、2001年からは小学校の低学年から三つの言葉を同時に教え、更に中学校の段階から第二言語の漢語による英語教育が普及している。

中国の民族教育において、トライリンガル教育を実施するための公的な言語政策とインフラ設備は揃っているだろうか。三つの言葉を同時に教えることで、三つともうまく習得できるのだろうか。バイリンガルの生徒はモノリンガルの生徒に比べて第三言語を獲得するのが早い（カミンズ 2005）と言われるが、モンゴル語と漢語のバイリンガル教育を受けるモンゴル人学習者は英語をうまく習得しているのか。早期英語教育の必修化に伴うトライリンガル教育システムの導入が民族学校へ通う中国少数民族学生の言語能力の発達・形成にどのような変化を与えるか。民族教育当事者たちはトライリンガル教育についてどう認識されているか。また母語教育と母語を媒介

語としての教育をどう位置づけているか。さらに、トライリンガル教育がうまく行っていなければ、その発生要因は何であろうか。以上の問題意識を踏まえ、本研究では、英語教育必修化に伴う民族教育の中身を解明し、英語教育とトライリンガル教育を含めた民族教育がどう発展するか方向性を示し、これからの民族学校における存在目的及びあり方について探っていきたい。

2. 海外アカデミック・ディスカッションの必要性

これまで、バイリンガル教育に関する研究は数多く行われており、その成果は言語教育の現場において様々な形で活用されてきた。しかし、バイリンガルからトライリンガルまたはそれ以上の言語を習得するための研究は少ない。また、バイリンガル教育の多くは結果的に多数派言語への同化をもたらす移行型言語教育であると、その目的と形態が不明瞭で不安定なものとして認識されている（ベーカー 1993）。中国の民族教育においてもその曖昧性が露呈し、民族言語教育重視という立場から策定されたものも、実際には漢語普及の道具になっている（庄司 2003）。そのため、バイリンガル教育という基本路線を維持しても、民族言語習得には効果を満たされないものも含まれている。このように先行研究を読んできると、バイリンガル教育の可能性とあり方について疑い始めることが多くなり、バイリンガル教育がもっとも進んだ欧米の研究者はどう見るのか、知りたくなった。

ちょうどこの時期に、大学の中で「女性リーダーを創出する国際拠点の形成プロジェクト—海外アカデミック・ディスカッション」に関する応募を見つけ、自分の問題意識にぴったりと合致すると思った。それから、申請手続きを始め、私が参考文献をよく論文を拝見する、ニューヨーク市立大学の教授、社会言語学で世界的有名な研究者 Ofelia Garcia 氏の研究室を訪問することにした。そして今年 9 月に、

ニューヨーク市立大学大学院の博士後期課程のセミナーで、Ofelia Garcia 教授による講義「Bilingualism in Education」とゼミナール「Bilingualism, Multilingualism and Education: Global Sociolinguistic Perspectives」に参加することを希望したところ、教授の快諾をいただき、現地へ伺うこととなった。

3. 海外アカデミック・ディスカッションの目的とその目的の達成

私は海外アカデミック・ディスカッションにおいて、以下三つの目的を持って臨むことにした。1) バイリンガリズムとマルチリンガリズムに関する近年の研究結果を知る。2) 教授の研究チームによるゼミに参加可能なので、現地の研究者や博士課程の院生達と討論の機会を通じ、バイリンガリズムとマルチリンガリズムにおける問題意識をシェアする。3) バイリンガル教育が学校教育の中での理想的なあり方をトライリンガル教育に応用する可能性について、内モンゴル自治区における言語教育事情と照らし合わせながら、教授と意見交換する。

現地に到着してから、私は自分の問題関心を伝えたと、Ofelia 教授に三週間にわたるスケジュールを計画していただいた。その中では、教授による講義「Bilingualism in Education」に毎週参加すること、教授が関わる三つの研究チームの活動に毎週参加すること、ニューヨークの公立小学校への見学、個人面談と、Nicholas M. Michelli 教授による講義「Education Policy」を聴講することなど、ボリュームのある内容だった。この他にも、私はニューヨーク市立大学が開催する、Tel Aviv University からの Elana Shohamy 教授による特別講演「Testing and Language Minority Students: Personal Biography and Current Research」と、博士号を取ったばかりの Laura Ascenzi-Moreno 氏による講演「Writing Your Dissertation Proposal」などに参加した。

時差ボケに加わり、ハードな三週間のスケジュールだったが、想像する以上に有益な研究訪問になったと言える。それは訪問当初の目的達成にほぼ近づいただけではなく、研究方法に関する新しい発見や、バイリンガリズムに関する違ったあり方の発見など、たくさん新しい発想と見解を伺ったからだ。

まず、Ofelia 教授による後期課程の講義「Bilingualism in Education」において、一学期にわたる内容を三週間で三回しか聴講できなかったため、より完整した知識構造を得ることができなかった。しかし、教授は私の問題関心を意識されながら講義をされたお陰で、私は短い期間でも、今後の研究にヒントとなるポイントを幾つか掴むことができた。例えば、バイリンガル教育という概念に関して、多くの文献では、「コミュニケーションの道具」として扱うことが多いが、近年の社会言語学分野での研

究では、この概念に「アクション、ローカルプラクティス」という新たなニュアンスを入れていることが分かった。この概念の変化に関して、自分でちょっと考えれば「確かにその通りだ」と思い始める。バイリンガル教育は前世紀において、支配者側の言語教育政策の一環となっていたが、グローバル化が進化する今日では、言語的少数派が言語権を維持するため活動に変化しつつあるのである。

次に、Ofelia 教授の研究チームの活動に参加したところ、文系の研究にも企業のマネジメントが適応されることが分かった。毎回のゼミでは、前回の課題の達成が確認され、解決できなかった部分を全員で検討し、次の課題の役割分担を決め、何を誰が何時まで完成するかなど、細かいスケジュールを決めて解散する。三つの研究チームの活動に参加したが、それぞれ異なった課題研究が行われ、進捗状況も違っていた。予算とメンバー配分を決める回もあったが、最後の仕上げをどのようにデジタル化するような完成を迎える回もあった。ここでは、知識より、研究のノウハウや研究のマネジメントについて新たな発見があったといえるだろう。

また、私は最初の頃、Ofelia 教授に「バイリンガル教育の理想的なあり方」について尋ねたところ、教授に「バイリンガル教育は地域の特徴、言語の特徴、政府の方針やコミュニティの協力によって、あり方が違う。理想的なあり方より『良い事例』をたくさん参考することが大事だ」ということを教わった。そして、教授の研究チームが関わるニューヨークのとある公立小学校での教育経験が良い事例として紹介され、見学することも可能になった。私は一日でその小学校の幼稚園部から1,2,3,5学年次までの見学を実現できた。この小学校はスペイン語と英語のバイリンガルプログラムを推進する小学校で、スペイン語を母語としないアジア系やアフリカ系の生徒も多く在籍しているため、ケースによって、学校教育だけでバイリンガル能力を育成する責任を果たしていることになる。教員はいずれもバイリンガルで、カリキュラムは一日に一回教授言語を変える形で行われる。教授言語が毎日変更されても2、シラバスが順調に行われていることに驚くばかりであった。生徒達にとって、前日に英語で習った数学の内容を次の日にスペイン語で復習することは、極普通の日課のようで、不自然さや学習内容の連続性に欠ける現象は見られなかった。このようなバイリンガルプログラムに関する見学を通して、今ひとつ言えるのは、「バイリンガル能力は適切な学校教育によって育成、または発展されることが可能である」ではないだろうか。これまで、私は言語教育の結果ばかりに注目して、その可能性を検討してきたが、この見学を通して、バイリンガル教育とは、「アクション」であり、「ローカルプラクティス」であることをさらに理解することができた。したがって、バイリンガル能力とは、育成しようと思っ強い気持ちと、適切な

学校教育があれば、十分理想的な形にまで発展できるという可能性を知らせてくれた。

以上のような主なファインディング以外に、バイリンガル教育及びマルチリンガル教育を実施する際、言語の機能を分けて行うことに心がけることの重要性に気付いた。また、自分の経験をどのようにして研究動機へと接続するかなどについて発見できたことから、成果を得たと言えよう。

4. アカデミック・ディスカッションと今後の研究

アカデミック・ディスカッションを通して得た研究成果は、私の今後の研究活動を大いに影響するものである。私の研究は、バイリンガリズムやマルチリンガリズムなど比較教育社会学と社会言語学的理論に基づき、民族教育における英語教育のあり方とより有効なトライリンガル教育（ここでは、バイリンガル教育に加わる英語教育のことを指す）システムの検討であり、グローバル時代における「民族教育」のモデルとその新しい教育の可能性を探ることである。今回の研究訪問では、知識の学習と事例学習を通して、バイリンガル及びトライリンガル教育を実施する可能性とそのあり方の一例が主なファインディングである。今後は、博士論文や投稿論文において、その成果を反映していきたい。また、Ofelia教授は私の研究分野にとっても興味を持っておられ、来年から執筆される書籍の中に、内モンゴルの事例を紹介する章を設けると言われた。その章で紹介する内モンゴルにおける言語教育の現状の記述部分を担当するよう依頼された。大変光栄に引き受けさせ

ていただき、原稿を来年3月までに送るように、作成している最中である。

注

1. 中国で行われている、漢語と民族語の二言語教育を指す名称。中国では、「双語教育」と呼ぶ。本論文では、「バイリンガル教育」という表現を使用する。
2. 英語とスペイン語のバイリンガル教育で、一日に一回教授言語を変えて授業を行うこと。例えば、月曜日の授業が全て英語で行われると、火曜日の授業は全てがスペイン語で行われることになる。

参考文献

- バーカー、コリン（1993[1996]）『バイリンガル教育と第二言語習得』（岡秀夫訳編）大修館書店。
- 庄司博史（2003）「中国少数民族新局面—特に漢語普及とのかかわりにおいて—」、国立民族学博物館研究報告 27(4)、683—724。
- Cummins, J. M. Danesi(2005), 『カナダの継承語教育 多文化・多言語主義をめざして』（中島和子・高垣俊之訳）明石書店。
- Cummins, J. (1981). Age on Arrival and Immigrant Second School in Canada. *Applied Linguistics*. 11, 132-149.
- Cummins, J. (1984). *Bilingualism and Special Education: Issues in Assessment and Pedagogy*. Clevedon: Multilingual Matters.
- Ofelia Garcia (2008). *Bilingual Education in the 21st Century: A Global Perspective*. John Wiley and Sons Ltd..